

国経研だより

神奈川大学 国際経営研究所
〒259-1293 平塚市土屋 2946
神奈川大学湘南ひらつかキャンパス
TEL 0463-59-4111 (内線 2200)

多民族社会での新たな発見と驚き

齋藤 純一

夏休みに海外に出かける日本人は以前に比べ減少しているとはいうものの多くの人々が成田や羽田から出国する。長期の休みを利用して、海外で日本とは異なる文化に触れることは自己の精神を鍛え、将来に向けての自分探しの手段となるかもしれない。

今年の夏、一週間という短い期間ではあるが、ベネチアとパリを取材と資料収集のため回ってきた。今回最初の訪問先であるベネチアは十数年ぶりの訪問であったが、現地のマルコ・ポーロ空港到着が夜の10時半ということもあり、ベネチア本島へ空港路線バスと水上バスを乗り継いで少し複雑な行程となった。

ある洋画の中で男優が列車を降り、サンタ・ルチア駅を出ると目前に大運河が迫り、タクシー乗り場などない状況に驚愕したシーンがあるが、初めて訪れた人は同じような思いを抱くに違いない。所変われば風土も変わるのだから、むしろ驚きや衝撃を新鮮さという感情に変えていくと旅も楽しくなるかもしれない。

私がサン・マルコ広場に到着したのは真夜中を過ぎていたが、まだ船着場には人もいて、迷路のような通りにはワインバーのような店で話しこんでいる人も多かった。店の人にホテル名を告げると分かったらしく、すぐにホテルの看板を見つけることが出来た。翌日には辺りを歩き回ってみたが、迷路のためか必ず道を間違えるので運河に沿って、サン・マルコ広場を中心にじっくり歩いてみることをお勧めする。途中でバイオリンの名器を展示した建物や美しい教会もあり、ヨーロッパ文化の奥深さを感じさせる。本島の近くには有名なガラス細工の工房がある小さな島があるが、観光が目的ではないので今回は立ち寄らなかった。その工房には以前日系のイタリア人が日本人旅行者に日本語でガラス細工の製造過程を説明していたように記憶している。

ベネチアに2泊した後は、パリに向かい自分が研究対象としているある離国作家の足取りを辿ることにした。パリは何度来ても何らかの新しい発見がある都市である。最近は多くの店で外国人には英語で話してくれるように

なり、旅行者には便利になったかもしれない。フランス人も自分の知っている語彙を最大限に活用して意思疎通を計る姿を見ていると、時代の趨勢を感じ取ることが出来る。

早速パリの街角である光景に遭遇した。ある若者向きのブティックで小物を購入した時の出来事である。レジで会計を済ませようと購入品を持っていくと、レジで少し訛りの強い英語でクレームをつけている父親らしき人の大きな声が店内に響き渡っていた。先ほど購入したばかりの娘さんの靴が、サイズが合わなかったらしく交換して欲しいということだった。アメリカやカナダなどの英語圏ではレシートとその品物を持っていけば交換に応じてくれるが、フランスでは靴の入っていた箱と一緒に持ってくるのが規則らしかった。多く人は箱など不要なので購入の際に靴だけを紙袋に入れてもらって持ち帰るため、箱が必要なことは意外だったのかもしれない。その父親はレシートを出せば、交換するのは国際社会での共通の常識だといって引き下らない。それに対して男性店員は「その時レジにいた女性が箱の件を説明しなかったようだが、私には落ち度がない」ということで平行線を辿ったまま10分くらい経過した。後ろに私が痺れを切らせて立っているのを気づいてか、その父親は直接マネージャーに交渉させてくれと凄んでいた。それでも男性店員が「マネージャーに話しても同じことだと思いますよ」と諭すように言っていたのが印象的だった。レジでその間に会計を済ませて店を出たが、返品交換が出来たのかは分からない。昔であれば、フランス語だけで対応し、英語でのクレームを受け付けなかったかもしれない時代を思うと隔世の感がある。

もうひとつフランスの多民族社会を象徴するような出来事に遭遇した。地下鉄で電車を降りた時のことである。私の前に見るからにフランスの若者らしい出で立ちの男性がiPhoneで音楽を聴きながら、ドアの前に立ち、駅に着くとすぐにドアのボタンを押し、ドアが開くとすぐに降りようとしたのだが、北アフリカ系かと思わ

れる小さな子供が先に電車に乗り込もうとした。フランス人青年はその子供を押しよけるようにして降車すると、その子供が「お母さん、あの人僕を押しよけたよ」というような言葉を発していた。本来は降車する人が先に降りるが、小さな子供を押しよけるという行為に怒ってか、子供の母親がその男性を追いかけて、「ちょっと、あなた子供を押しよけるような乱暴はやめてよ!」と猛烈に抗議していた。その青年が無視するような表情だったので、母親は手に持っていたセーターを振り上げて威嚇していた。想像するに同じことがアメリカで起きていたら大問題になっていたはずである。マイノリティーの人々の権利を出来るだけ保護しようとするアメリカと、フラ

ンス的価値観を身につけ、フランス語で生活を送る市民は民族、或いは文化的背景に関係なく、平等の権利を与えられる国とでは多民族社会のあり方そのものが根本から違うように思える。

海外に出ると普段体験できないような出来事に遭遇することがよくあるが、自己の精神を鍛錬する機会であると思って億劫がらずに体験してほしい。異文化圏における体験は皆さんの今後の人生にとって何らかの知的財産となるからである。国際経営学科に在籍している皆さんは将来多様な企業環境の中で生き抜くためにも若いうちに海外に出て自身で異文化を吸収して、異なる価値観や文化への免疫力を高めておいてもらいたい。

(所員/さいとう・じゅんいち)

Embracing Diversity

Connie Roguski

A colleague once asked me, "How can you accept everyone?" The question stunned me. I thought that was inherent in my job description. In our teaching, we help students to see the hidden richness in themselves, those around them and in the world as a whole. To prepare them for their roles as global citizens, we teach foreign languages, cultural and historical background information, and methods for understanding what they see in societies, economies, and the business world. We also encourage them to be aware, curious and open-minded. We want them to become competent in intercultural situations.

Beyond language learning motivation studies, I also looked to UNESCO, the United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization, for some insights about what accepting others might include. In a 2013 report, a summary of necessary skills and competences for intercultural competence was mentioned. The list offered by Deardorff (2011) includes:

- Respect ('valuing of others');
- Self-awareness/identity ('understanding the lens through which we each view the world');
- Seeing from other perspectives/world views ('both how these perspectives are similar and different');

- Listening ('engaging in authentic intercultural dialogue');
- Adaptation ('being able to shift temporarily into another perspective');
- Relationship building ('forging lasting cross-cultural personal bonds');
- Cultural humility ('combines respect with self-awareness').¹

To develop these skills surely requires time and practice. It takes experience to become comfortable with diversity, to actually enjoy the variety that surrounds us, even within one culture. Students mention making friends from different regions of Japan as one of the most stimulating parts of their university experience. While some students have had many opportunities for travel or contact with people from other countries, many have not. For some, our university provides the very first chance to actually speak with a foreigner, whether it be a professor, a classmate or a visiting student or researcher. Talking to foreigners and dealing with the unexpected in small talk conversations can make many students nervous. Even before having a study abroad experience or overseas internship, students can acquire some of the skills and awareness that are necessary for intercultural communication. On campus, in small ways, openness can develop.

This year I started greeting everyone I passed in the hallways of our building. Knowing that students are often uncomfortable with English, I spoke Japanese unless I knew they liked English. In many countries, when sharing the same bike path, narrow street or hallway, it is common to greet the approaching person. Just recognizing the other person, instead of looking down or away can create a friendly atmosphere.

I hoped that perhaps even just saying hello to me could give students a chance to feel a bit more international. People often mention how shy Japanese students are or how they lack confidence in their English, or how busy they are. Of course, if the people in the hallway were talking with others or intent on what they were doing, I said nothing. Intrusion was not my purpose; inclusion was. At the beginning of the year, many new students seemed to appreciate a greeting. Most older students, too, responded. A few nodded or said nothing. Now, however, some students I do not know personally say hello first, in English or in Japanese.

Dealing with the unexpected is necessary to cope and thrive, especially in intercultural situations. Just being able to go out of yourself and respond to someone's "Hello" or "Hot day, isn't it?" or "Nice shirt!" is a start. When I said hello and commented on a student's shirt with an English message, he was startled. After I explained that the words on his shirt meant something like "fashionable guy", he seemed happy. Leaving down the stairs, the student said to his friend, "Communication, get!" Other students sometimes laugh as they walk away. They may be uncomfortable or they may think it odd for me to

speak to them though I do not know them. If our students can become less flustered talking to foreigners near them and have more confidence in their ability to interact, without it feeling so unusual, they will be better able to adapt.

In classes, too, we can continue to give students opportunities to consider and study issues from many perspectives. Recently, students read about the ban on sales of water in plastic bottles near official city buildings in San Francisco, California. Students thought about this new regulation as if they were the city officials, vendors, office workers, drink makers, garbage collectors, police who would enforce fines, and average citizens. The topic offered not only the chance to step into someone else's shoes, but it also encouraged discussion of cultural similarities and differences in protecting the environment.

These are just two small efforts to encourage students to see themselves as part of the world community. On a larger scale, following the news, exchange with international students, meeting with people in the community and overseas to do various projects, peer tutoring, and actual study abroad are very desirable. Perhaps we can further enhance the international flavor of our community by adding multilingual signs, or offering photo displays that highlight the countries where students have studied or where they are from. We can also simply greet each other more often and continue to encourage an atmosphere of openness and connection.

¹*Intercultural Competences: Conceptual and Operational Framework*. Paris, France: UNESCO, 2013. 24.

(所員/コンスタンス・ロゴスキー)

◆国際経営研究所活動状況◆

- ・地域連携
湘南ひらつかテクノフェア2015後援(2015. 10. 22~24)
平塚市産業活性化セミナー(第9回)後援(2015. 11. 19)
- ・協力/後援行事
学内講演会(講演:平塚信用金庫)(2015. 11. 20)
- ・講演会開催(日程変更の可能性あります)
公開講演会(第二回)2015. 12. 17
公開講演会(第三回)2016. 1. 22

◆新任の先生紹介◆

2015年度後期に新たに石濱慎司准教授が研究所メンバーに加わりました。今号の研究余滴にも寄稿いただきましたので、各位にはどうかご一読ください。

◆おしらせ◆

1994年より研究所が設置していた「テーマパーク資料室」(6-321)が役目を終えました。貴重な資料を長期間寄託賜った故堀貞一郎氏、並びに関係各位に衷心より感謝申し上げます。(所長:行川)

かけっこ教室

石濱 慎司

この10月に神奈川県立神奈川大学経営学部に着任した石濱慎司です。健康科学、生涯スポーツなどの授業を担当しております。わかりやすく言い換えると体育です。この研究余滴の原稿依頼も着任と同時で、「研究余滴とは何か？」から始まりました。今では簡単にネットで過去の国経研だよりをみることも簡単になりましたものの…。

「よーい、ドン」

秋の空は天高く、運動するには絶好の季節に聞こえてくる音であります。この時期は、小中学校や町内会の運動会も数多く開催される時期で、私の住んでいる東京の隅のある町でも同じです。

私の自宅の近所にアジア大会の陸上競技三段跳びで入賞、日本歴代10傑の輝かしい記録の経歴をもつ、私と同年代のお父さん、Aさんが住んでいます。ちょっと反則のようですが、この方も数年前から町内会の運動会に参加して楽しんでいました。昨年、運動会の打ち上げの席で「子どもたちに陸上を教えたい、陸上教室をやりたい。」と話され、お酒の勢いも手伝って「やりましょう！」と盛り上がってしまいました。

それから月日たち、新年度。私は町の子ども会のブロック長となってしまったことも重なり、Aさんに

「“かけっこ”教室を春からやりましょう」と持ちかけました。告知は、ポスター数枚とロコミだけ、月一回、日曜日の朝7時から、定員なし、月謝なし。場所は今時めずらしい空き地です。しかし、ふたを開けてみると、子どもだけで50名を超える人数が集まり、我々がびっくりしてしまうほどでした。「ちょっとでも速く走りたい」という子どもたちもいれば、親から「行ってこい！」と言われてきた子どもたちがゾロゾロ。教室も回数を重ねるうち小学校低学年が中心に20名前後となり、親から強制参加を言い渡された子どもは少なくなったような。

私の相手は宇宙人の小学生。いつもの大学生に対しての授業と違って、日本語なのに通じません。草いじり、友達とのおしゃべり、極めつけは、厳しいツッコミ！アドバイスをして実践しているというよりは、ただ本能のまま動いているだけに感じ、本当に理解しているのか、伝わっているのか半信半疑のまま進みます。私にとってはすごく新鮮で、わかりやすく説明すること、意識をこちらに向けること、など授業の延長線上のようで、初心に戻りながら子どもたちと関わっていることは、本当に楽しい時間です。しかし、Aさんは

普段は会社員です。教室前には資料を作成し、終了後にはあれこれと考え、伝わっているかなと心配して、いつも落ち込んでおりました。

そして秋の運動会。私も小学校の運動会へ、ふたりの息子の応援にかけつけました。気になるのは、息子たちと「かけっこ教室」に参加している子どもたちの徒競走。

「え!?!」

何とあの子どもたち変わっているではないですか。スタートから前傾姿勢を保ち、スピードが上がってきたところで、顔を正面に向け、腕を大きく振り、最後まで全力疾走。ゴールを切り、全力を出しきって満足そうな笑顔をみて、感動してしまいました。このことは、すぐにAさんにも報告、「Bくんは…」「Cさんは…」などと詳細に説明したところ、大変喜んでいました。Aさんから「続けたほうがいいですかね」と問われた私は、「当然です！我々が腰の曲がったおじいちゃんになるまでやりましょう」と間髪入れずに答えてしまいました。

次の日は町の運動会、主役は地域住民。そして、Aさんは最後の種目である年齢別リレーに出場し、トップでバトンを受け、そのままゴールテープを切りました。40歳も半ばの彼ですが、

陸上に対する情熱は、まだまだこれからも冷めることはなさそうです。

普段、スポーツを理論的に見ることが多いので、このような実践的な取り組みは改めてスポーツの楽しさを教えてくれたような気がしています。伝わっているのか、理解しているのか、ではなく確実に子どもたちのからだに染みついた瞬間をみることができました。

ちょっとしたひと言から、共感したお父さんたちと一緒にこの「かけっこ教室」は成り立っています。たったひとりの情熱と行動力でも、周りの人間を引き込む力があり、達成したあとの喜びは何物にも代え難いと感じた秋のひと時でした。

(所員/いしはま・しんじ)

編集後記

47号をお届けします。今号では齋藤先生、そして初めてロゴスキー先生にエッセイを書いて頂きました。研究余滴は石濱先生に失礼にもまったく時間的余裕のない状態で原稿をお願いしたのですが快くお引き受け頂き大変助かりました。(S)

研究余滴